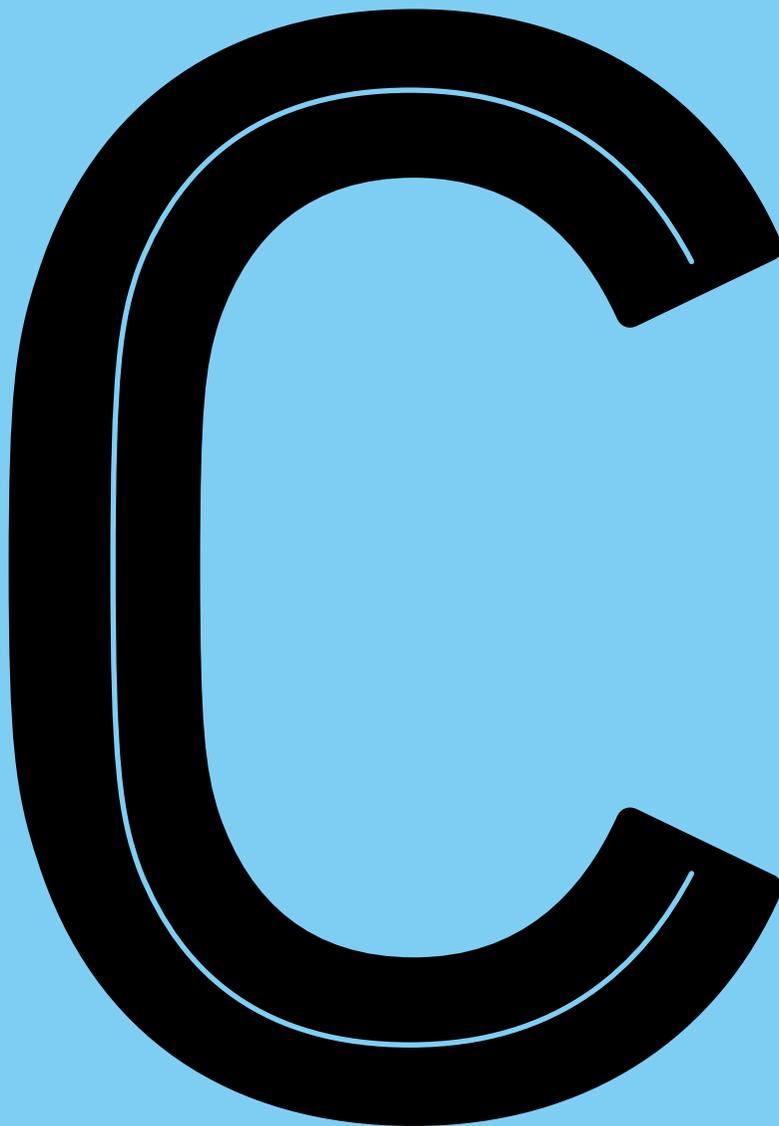




paper



no.004



鞍田崇 × 堀田裕介  
(哲学者) (料理研究家)



小川次郎・藤浩志  
(建築家) (美術家)



みんなのうえん  
コーポ北加賀屋



鈴木裕之  
(イラストレーター)



## 鞍田崇 × 堀田裕介

(哲学者)

(料理研究家)

異なる活動領域を持つ2人による対談企画「CO-DIALOGUE」。4回目となる今回は、暮らしにおける豊かさを探る、哲学者の鞍田崇氏、食材がつくられるその源流から食と人との関係性を考える、料理研究家の堀田裕介氏を招き、それぞれが考える「持続可能な暮らしのあり方」についてお話いただいた。

### 想いの受け皿になること

**堀田**：昨年11月、宮城県石巻市にある市役所庁舎1Fで、復興プロジェクトの一貫として、高校生たちと一緒に石巻カフェ「**カキカッ**」（かきかっこ）というお店をオープンしました。いまだかつて、日本の片隅にある小さな田舎町がフォーカスされたことは無いのではないかと思うほど、今、世界中から注目され、援助を受けています。その様子を見て、高校生たちも「この土地を守っていかなくちゃいけない」という地元への愛情や、未来への危機感が芽生えてきつつあるんです。

**鞍田**：僕も、慣れ親しんだまちを阪神淡路大震災で失ったので、その子たちが抱く地元への想いはすごく理解できます。

**堀田**：東日本大震災では、地域への愛が剥き出しになりましたね。最近、カフェで高校生の彼らと接していると、震災で助けられた経験から、何者でもない高校生が消防士、看護師になりたいという声を聞くことがあるんです。若者たちのなかから、「地元を根ざして、地元を生かす」というムーブメントが生まれてくるんじゃないかと楽しみです。僕なりの方法で、後押ししたいと考えています。

**鞍田**：素晴らしい。18年前の僕は、専攻である哲学からの答えを見だせず、自分に何ができるのかわからなくなっていました。そんななかで、被災された方の話を聞く、いわゆる「傾聴ボランティア」に偶然関わり、その活動にのめりこみました。本来、哲学は、言葉をつくる側ですが、ひたすら聞き役に徹していましたね。

**堀田**：哲学を学んでいたからこそ、そのときに有効な言葉を見つけたかったのかもしれないですね。

**鞍田**：そうですね。だけど、活動していくうちに、「聞く」「引き出す」ということが、現代の哲学における一番の役割かもしれないと、腑に落ちました。本当に語るべき人から言葉が紡ぎだされる状況をつくること、と言ってもいいかもしれませんね。同じような役割は、堀田さんが手がけている活動にも求められているん

じゃないでしょうか。手がけているプロジェクトの話をお聞きすると、ただお腹を満たすことではなく、コミュニケーションとしての食の機能が存分に発揮されているように思います。

### 自分ごとにしていく姿勢

**堀田**：地方では、地域のコミュニティが何百年と生き残っている姿に出会うことも多いです。ただ、僕が生まれ育った千里ニュータウンは、そういったコミュニティはないんです。完成当時は「幸せの象徴」とも呼ばれていましたが、今では廃墟と化して……。

**鞍田**：20世紀の幸せを運んできたニュータウンが、ゴーストタウンになっているというのは皮肉ですよ。僕も新興住宅地で育ったのでわかります。要は、次世代に継承するしかけが欠落していたのが大きな理由でしょう。でも、近年では、変化も感じます。正月に帰省したら、けっこう同世代が帰ってきている。それこそ村的なコミュニティが生まれそうな兆しを感じました。

**堀田**：それは、あるかも。コミュニティのために自分が働きかけることはしないけれど、ゆるいつながりが残っている感じは受けますね。その一方で、「マンションの住民用に農園をつくるから、料理教室をしてくれ」という依頼があって。そこまでしないとコミュニケーションが生まれれないのかと、少し愕然としました。

**鞍田**：そんな動きもあるんですね。

**堀田**：ただ、都市における「農」って可能性があると思っていて。その先陣を切っているのがキューバです。1950年代のキューバ革命の際、経済的にもアメリカから独立するため、農地改革をしたんですね。まちなかのコンクリートを剥がして、すべて畑にすることで自給自足を目指し、都市のいたるところに畑があるんです。まるで、日本のあちこちにあるコインパーキングみたいな感じ(笑)。



photo: Mai Narita

**鞍田**：結果的に、まちに対して常に自らの手をかけることになったというわけですね。ポイントは「自らの手」ってことかな。それでふと思いついたのが、パリの吸い殻。パリって、そこら中に吸い殻が落ちていて汚い。その点、日本はクリーン。だけど、階段で重たそうなスーツケースを持っていて、手を貸してくれるのは、日本よりパリの方が多い。日本では、制度やシステムを整備することで、まちはきれいになったけど、「何も冒していないから、それ以上何もしない」という責任放棄な傾向を助長している気がします。

**堀田**：個人の力では、どうしても大きな変動にはなりにくいの、普段から身の丈にあった方法で、自分たちのコミュニティなり、街、人に働きかけていくことが大切なのでしょうね。

**鞍田**：だと思えます。さらに言えば、自らの暮らしに対する愛着といったエモーショナルな問題でもありますよね。

### 暮らしに感情をそそぐ

**鞍田**：昨年、瀬戸内生活工芸祭のコンセプトブックとして刊行された「道具の足跡」という書籍があります。器についての本なんですけど、その巻頭に、小説家の川上弘美さんがエッセイを寄せていて、「器のことを、ちゃんと考えたことはないんだ」とはじまる(笑)。彼女は、器を、その時々々の感情に寄り添う媒体としてとらえていて、極論を言うと、感情さえあれば、器なんて何でもいい。今、こういう話が広がっていくのも、きっとエモーショナルなものに対する欲求があるからだと思うんです。

**堀田**：もちろん食材も重要です。だけど、そのまわりには、誰と食べるかだったり、その雰囲気やタイミングなど、さまざまな要素がある。ただただ過ごす毎日であっても、その暮らしぶりは定型ではないんです。だからこそ僕は、料理研究家という肩書きで、食材がつくられる源流や素材そのものについて、丁寧に理解し

ようとしているところもあって。

**鞍田**：そうしたアプローチは、僕と似ているかもしれませんが。僕の関心は、そもそも「暮らしに対する愛着」とは何か、それはどういうものを通して、またどういものに支えられて得られるのだろうかということにあるんです。その具体例が「民藝」。民藝って、地域の気候風土に即した、暮らしのためのものづくりという側面もある。だから、背景に自然環境のような、大きなものが横たわっているんです。産業化された世界は、その背景にあるものとの接続を断ってしまい、手前にある人間だけの世界で、新しいものを生み出してきたわけです。

**堀田**：ものづくりの現場を見ると、実感しますね。現場でつくっている人のことが見えづらい社会になっている。そう考えると、民藝品は、人々の暮らしにおける愛着を可視化したもので、分断された自然との接続点としてとらえることもできますね。

**鞍田**：そうですね。みんながそれを取り戻そうとして、人間の暮らしだけではなく、その背景の自然環境や地域の広がりまで目を向けようとしている状況がある。それは、いわゆる「エコ」などに回収されるものではなくて、もっと切実で、本質的な欲求とも言えます。そのなかで、考えられる「豊かさ」とは、くり返しになるけれど、どれだけ自分の暮らしに愛情や愛着、愛される、その実感が持てるかなのでしょうかね。

**鞍田崇**  
Takashi Kurata  
1970年生まれ。哲学者。現在、総合地球環境学研究所特任准教授。専門は哲学・環境思想。暮らしの“かたち”を問いなおすという視点から、新たな環境意識のあり方を吟味。著作は、『(民藝)のレッスン』(編著)、『焼畑の環境学』(編著)、『雰囲気美学』(共訳)など。

**堀田裕介**  
Yusuke Hotta  
1977年生まれ。大阪府出身。「食べることは生きること 生きるとは暮らすこと」をモットーに都市と地域の架け橋として、生産者と生活者をつなぐ料理研究家。風土とfoodを融合させた食のモザイクアート「foodscape!」を通して食べることへと人々を誘う。

## リレーコラム つないで見える、人とまちの多彩なあり方



### ためにならない アートのはなし

小川次郎  
Jiro Ogawa



建築家・日本工業大学建築学科教授  
主な作品に《日本工業大学百年記念館／ライブラ  
リー&コミュニケーションセンター》(2010年日  
本建築学会作品選奨)、《EPSP》(代官山インス  
レーション2003 最優秀賞)など。「大地の芸術祭  
越後妻有アートトリエンナーレ」には2003年から  
4回出展。

＜小川さんが選ぶ次のコラムニストは…  
西田司氏(建築家)  
てっきり建築家だと思っていたら、最近では村まで  
設計している妙人です。(小川)

### まちに濃厚な時間と 風景をつくりだす方法

藤浩志  
Hiroshi Fuji



美術家・十和田市現代美術館副館長  
京都市立芸術大学大学院美術研究科修了後、パブ  
アニューギニア国立芸術学校講師、都市計画事務  
所勤務を経て藤浩志企画制作室を設立。「ヤセ犬の  
散歩」「お米のカエル物語」「Kaekko」など、各地  
で対話と地域実験の場をつくる美術類のデモン  
ストレーションを実践。 <http://geco.jp>

＜藤さんが選ぶ次のコラムニストは…  
永田宏和氏(企画・プロデューサー)  
常識とされている概念や手法をしっかりと疑い、  
実際に動きながら感じようとする努力の人。(藤)

先生(以下、先)：しかし、今年のトリエン  
ナーレ(注)もなかなか楽しかったな。  
学生(以下、学)：現場に割けた時間は実質ひ  
と月ちょっと……死ぬかと思いましたよ。  
先：悪い悪い。ときに、トリエンナーレは単  
なるアートフェスというより、「地域に対して  
アートに何ができるか？」を問うイベントとも  
言えるだろ。担当者としての実感はどう？  
学：現地で制作する立場から、地元の人たち  
と仲良くするのは決して悪いことじゃないし、  
むしろ楽しめたんすけど、「さあみなさん元  
気にしてあげますよ！」みたいなことを強調  
しすぎると、地元の空気は結構しんどいこと  
になりますよね。  
先：しんどい？  
学：例えば、明らかに少子高齢化しつつある  
コミュニティで、「みんな頑張れ頑張れ」っ  
て掛け声かけても、日々の暮らしに精一杯の  
方々にはかえって気の毒な場合とか……。  
先：なるほどね。しかし、最近ではアートも建  
築も、まちおこしやら村おこしやら何かしら

1987年、バブアニューギニアの原生林の奥  
で、皮膚病で毛がちぎれてハゲハゲで、耳や  
尻尾がちぎれているガリガリの、いかにも  
弱々しい卑屈な表情のヤセ犬たちが、獲物の  
野豚を見つけた瞬間にエネルギーで満ち溢  
れ、猛然と狼のように走り出す姿を目撃した。  
その瞬間、その姿に猛烈な「美しさ」を感じ  
て感動し、「美しさ」とは何かを知り、ヤセ犬  
のようでありたいと願うようになった。そのと  
きから僕の人生は変わった。……ということ  
になっている。しかし、もう25年も前のこと。  
その記憶は僕自身が幾度となく回想し、編集  
を重ねた記憶に塗り替えられ、何が現実だっ  
たかなんてわからなくなってしまっている。  
しかも、その一瞬の記憶は、実は数日の出来  
事だったかもしれない、マラリアでうなされ  
続けた数週間だったかもしれないが、たとえ  
1年という長さでさえも記憶や意識、あるい  
は概念のなかでは瞬間的なものとして編集さ  
れ固着される。そのことも興味深い。ともあ  
れ、ヤセ犬のような地べたからの視点だけは

地域の役に立たないと認めない、という風潮  
が広まりつつあるな。そういう意味では、表  
現行為が社会的な役割を背負わされ過ぎか？  
学：で、今回気づいたんすけど、地元の人た  
ちにとってはボクらはどこまでいっても共同  
体の外部＝ストレンジャーなんですよ。勝手  
に来て何かやってるなコイツら、と。だから、  
アートを見に来る人たちと地域の人たちをボ  
クらが結びつけてやろうなんて大それたこと  
考えないで、イベントのあるなしに関わら  
ず、ボくら自身がひっそりと、長い時間かけ  
てつきあっていけば、結果的にそれが地域を  
開くことになるのではないかと……。  
先：いいこと言うね、たまには。だけどこの  
会話って「これからのまちづくり」っていう  
このコーナーの主旨に合ってる？  
学：でも、まちづくりに燃える若者には結構  
有益な話になったんじゃないすか？  
先：キミもそのひとりだろうが。  
  
(注)「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナー  
レ」。3年ごとに新潟で開催される国際芸術祭。

## オープン北加賀屋 地域の出来事をひらく、伝える

### 北加賀屋みんなのうえんのいま

ともに学び、ともに育てる農園づくり



12月 みんなのうえん定例ミーティング  
Date 2012.12.15 13:00-17:00

みんなのうえんでは、月1回、メンバー全員が集まり、定例会  
を行っている。12月の会は、いつも以上に大盛り上がり。その中心に  
あったのは、半年かけて育てた「安納芋」だ。7月にオープンした  
農園で、最初に苗植えをした野菜のひとつが安納芋である。土づ  
くりの専門家・石山陽介さんに助言をいただきながら、みんなで  
大切に世話をしてきた。10月に収穫した後、しばらく熟成させ、  
そして待ちに待ったこの日。ついに安納芋を焼き芋にする。火を起  
こし、炭のなかに芋を投入。30分後、ひとつ取り出して、どきどき  
しながら割ってみると、見事な黄金色の安納芋が。香りとともに  
笑顔が広がる。その後は想いのこもった安納芋をおいしくいただき  
ながら、農園の未来について大いに語り合うことができた。

金田康孝(NPO 法人 Co.to.hana)  
デザインで社会の課題を解決するNPOに所属。アートの創造性と農を通して、  
世代を超えたつながりを生み出し、潤いのあるまちづくりを行っている。

### 堀田裕介のとれたてごはん

#### そら豆と桜海老の ペペロンチーノ

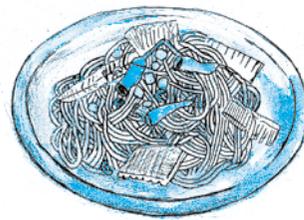


Illustration: Shingei Kokaji

新鮮な空豆をさやごと10分間  
塩茹でする。そら豆を茹でた残  
り汁でパスタを茹で、オリーブ  
油をたっぷりひいたフライパン  
に、鷹の爪、桜海老、みじん切  
りにしたんにくを入れて弱火  
にかける。んにくから香りが  
たってきたら筍、そら豆、茹で  
上がったパスタをあえる。茹で  
汁とバージンオリーブ油も加え  
て素早くあえ、温めたお皿へ盛  
り付けたら完成！

堀田裕介：1977年、大阪府生まれ。「食べることは生きること、生きることは暮らすこと」を  
コンセプトに、ケータリング、商品開発、料理教室、ワークショップなどを企画。



### コーポ北加賀屋のいま

多分野で活躍する協働スタジオの動き

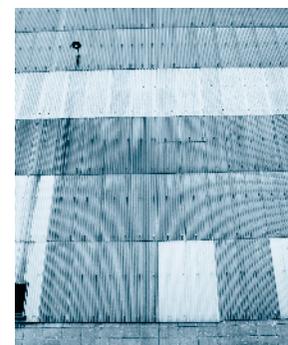


FabNight presented by FabLab Kitakagaya  
Date 2012.12.8 15:00-21:00

2013年はじめ、関西初のFabLabとして、「FabLab Kitakagaya」  
がコーポ北加賀屋に誕生した。FabLab(ファブラボ)は、オー  
ブンな市民制作工房とそのグローバルなネットワークである。日本  
国内にはこれまで、鎌倉、筑波、渋谷の3ヶ所にその拠点があつた  
が、関西では初。Learn(学ぶ)、Make(つくる)、Share(共有  
する)のサイクルを回しながら、個人による自由なもののづくりが身  
近になる社会や暮らしの創造をすすめている。オープンに先がけ  
て2012年12月、プレイベントを行った。冬のコーポ北加賀屋は底  
冷えするとのこと。そこで今回は、周辺で材料を調達し、2台のロ  
ケットストーブを制作。夜にはストーブを囲んで暖をとりながら、  
集まった30人で「ものづくりの未来」について語り合った。

津田和俊(FabLab Kitakagaya)  
資源循環・サステイナブルデザインを専門に、ものの流れや循環に着目しな  
がら、自然環境と人との関わりについて研究・教育活動を行っている。

### 北加賀屋オルタナティブスポット



#### 北加賀屋の質感

あらゆるまちに建物の外壁が存在する。ゆえに外壁がまちのテク  
スチャを決定づける。新興住  
宅地ではサイディングの唾くさ  
いテクスチャで吐きそうにな  
る。ではこのまちのテクスチャ  
は？ それは間違いなく、陰を  
孕み、積年の雨垂れが染み付い  
た、スレート波板である。いい  
風景だ。

家成俊勝：1974年、兵庫県生まれ。建築家。関西大学法学部法律学卒業後、大阪工業技術  
専門学校夜間部を経てdot architectsを赤代武志と共同で主宰。

# TOPICS from CFCO

おおさか創造千島財団 (CFCO) は、大阪で行われる芸術・文化活動の支援を通じて、地域の新たな価値を創造し、創造的かつ文化的に多様な地域社会の創出を目的として設立されました。

## NEWS 01

### 「Plant / Plant ー都市・人・自然の古くてあたらしい共生のカタチー」 千島土地株式会社／おおさか創造千島財団主催 レセプション開催のお知らせ

北加賀屋の特徴であるアートと、親和性の高い農を組み合わせた北加賀屋クリエイティブファーム、当財団の多様な活動をご紹介する機会として、このたびレセプションを開催致します。「Plant/Plant ー都市・人・自然の古くてあたらしい共生のカタチー」と題し、自然や植物と真摯に向き合うゲストの方々を招き、アート、トークセッション、食など、さまざまな角度から、都市と人と自然の関係性を考えるシンポジウムと懇親パーティーを行います。

日時：2013年3月29日(金) 15:30～  
会場：名村造船所大阪工場跡地 [北加賀屋 4-1-55]  
作品展示：栗林隆(アーティスト)、西島清順(花宇)  
シンポジウム：栗林隆(アーティスト)、西島清順(花宇)、山崎亮(studio-L代表)  
ケータリング：foodscape!、graf、種から育てる子ども料理教室、北加賀屋みんなのうえん参加メンバー  
※参加方法など詳細は当財団ウェブサイトに掲載予定。当日はIRON∞MAN 展示作品もご覧いただけます。



〈News01〉北加賀屋みんなのうえん参加メンバー



〈News02〉《廻転仁義 北九州造船大回転》久保田弘成 今回の新作では船を回転させるパフォーマンスを予定

## NEWS 02

### 2012年度 創造活動助成 IRON∞MAN 開催

時代の潮流にとらわれず、独自の考えと手法によってユニークな表現を追求してきた“鉄”の美術家5人が、かつての日本経済の繁栄を象徴する近代化産業遺産に集結します。参加作家の久保田弘成は、千島土地保有の倉庫にて滞在制作中の新作を発表予定。

日時：2013年3月13日(水) - 3月24日(日) 13:00～19:00(平日)、10:00～19:00(土・日・祝)  
※3月18日(月)、19日(火)休み  
入場：無料  
会場：名村造船所大阪工場跡地 [北加賀屋 4-1-55]  
出展作家：飯島浩二、角文平、久保田弘成、タムラサトル、橘宣行  
レセプション：3月16日(土) 17:00～  
飯島浩二 & 久保田弘成パフォーマンス：3月16日(土)、17日(日) 18:00～  
主催：NPO法人コンテンポラリーアートジャパン、IRON∞MAN 実行委員会

## ACTIVITY

### 2012年度 創造活動助成

#### 劇団子供鉦人「ヨーロッパツアー2012」

文・益山貴司(劇作家・演出家・俳優。劇団子供鉦人代表)

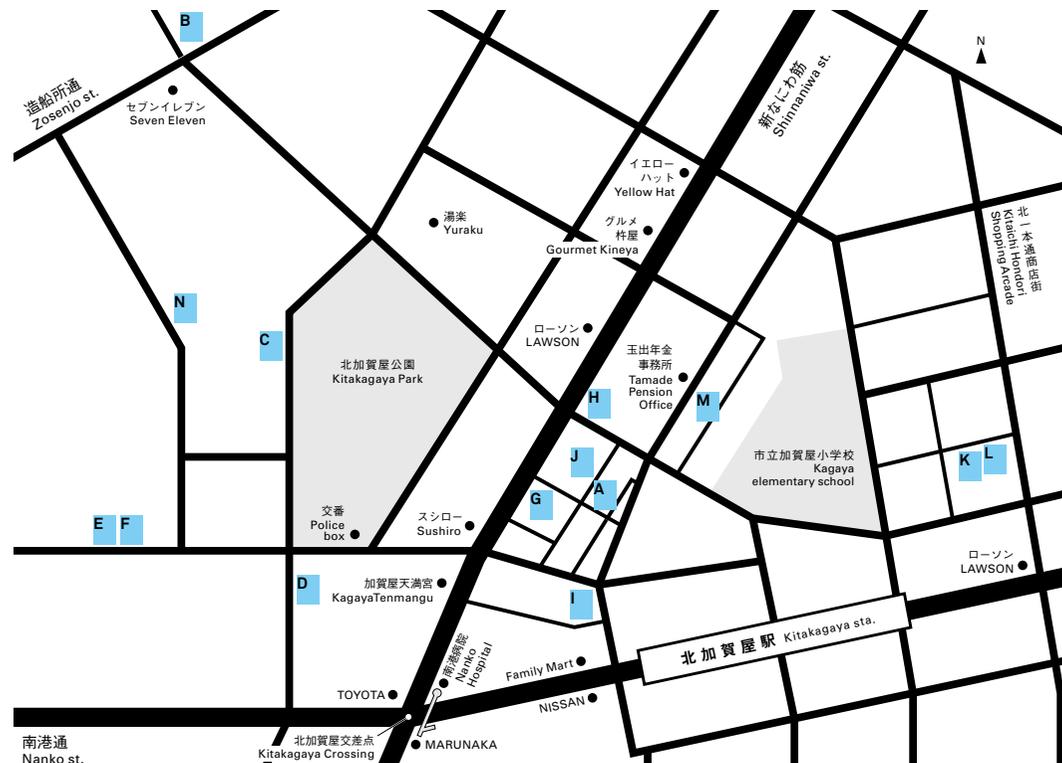
今回のツアーは、フランスのリールアートフェスティバルに招かれて上演。大阪らしい喜劇をベースにした作品で、各地で非常に喜んで迎えられ、盛んな拍手をいただいた。何度も見にやってくる観客まで現れた。私たちはかきこまった劇場ではなく、ライブハウスやサーカス小屋で上演する機会を多く得たが、観客の多くは庶民的な人々であり、大阪人に共通する「ノリの良さ」を持った人たちであった。



photo:Yu Yamaguchi

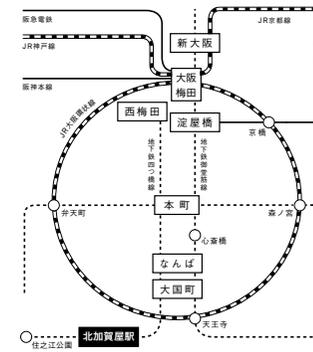
# MAP

おおさか創造千島財団では、芸術・文化が集積する創造拠点として再生が進んでいる北加賀屋エリアを、大阪における創造拠点のモデルケースとして、情報発信/ネットワーキングの支援を行っています。



2013年2月26日現在

- [A] ク・ビレ邸 / インフォメーションセンター [北加賀屋 2-8-8] URL: shoosen-kwan.com/
- [B] クリエイティブセンター大阪 (CCO) / 複合アートスペース [北加賀屋 4-1-55 名村造船所旧大阪工場跡地] URL: www.namura.cc/
- [C] コーポ北加賀屋 / 協働スタジオ [北加賀屋 5-4-12] URL: www.coop-kitakagaya.blogspot.jp/
- [D] おしま絵画教室 / アトリエ [北加賀屋 5-2-31] URL: www.takayukioshima.jimdo.com/
- [E] 藝術中心●カナリヤ条約 / アートスタジオ [北加賀屋 5-5-35] URL: shoosen-kwan.com/
- [F] 鞆籠館 / シェアハウス [北加賀屋 5-5-35] URL: shoosen-kwan.com/
- [G] AIR 大阪 (アーティスト・イン・レジデンス大阪) / 宿泊施設 [北加賀屋 2-9-19] URL: airosaka.com/
- [H] HOPE / アートスペース & カフェ・バー [北加賀屋 2-3-17] URL: space-hope.jugem.jp/
- [I] Co.to.hana (コトハナ) / アトリエ & オフィス [北加賀屋 2-10-21] URL: www.cotohana.jp/
- [J] 隠れ屋 1632 秘密基地 / 手づくりメガネ & アクセサリー [北加賀屋 2-8-9] URL: www.kakureya1632.com/
- [K] cornucopia / ギャラリー [北加賀屋 1-6-28 カガ第2ビル1F] URL: www.cornucopia3.jp/
- [L] 騒ギニ乗ジテ / ギャラリー・バー [北加賀屋 1-6-1 カガ第1ビル1F] URL: sawaginijoujite.jimdo.com/
- [M] 北加賀屋みんなのうえん (クリエイティブファーム) / コミュニティファーム [北加賀屋 2-4-6] URL: minnanouen.jp/
- [N] メガアート倉庫(仮) / オープン・ストレージ [北加賀屋 5-4-48]



主要駅から北加賀屋までのアクセス  
○ 地下鉄「梅田」駅から地下鉄御堂筋線で「大国町」駅まで約10分、地下鉄四つ橋線に乗り換えて約8分  
○ 地下鉄「西梅田」駅から地下鉄四つ橋線で約17分  
○ 「関西空港」駅から南海空港線で「粉浜」駅まで約53分、徒歩で約20分



鈴木裕之 / Hiroyuki Suzuki

1980年大阪生まれ、大阪育ちのアーティスト/イラストレーター。シュールかつストレージ、牧歌的なイラストレーションを得意とする。2011年、『ナンセンス図画帖』（青幻舎）。

コメント：若いときは、ずっと遊んでいたいけれども、なかなか毎日ダラダラと過ごしては人生がもったいない！しゃきっとせんかい！みなぎる力を役立てるんや！（鈴木）

paper C No.004

by Creative Foundation for Creative Osaka

「paper C」は、おおさか創造千島財団が発行するフリーペーパーです。関西におけるクリエイティブな活動を、財団が主に拠点を置く大阪・北加賀屋エリアから発信しています。

発行日：2013年2月26日

発行元：一般財団法人 おおさか創造千島財団 事務局

〒559-0011 大阪市住之江区北加賀屋2丁目11番8号千島ビル4階

TEL 06-6681-7806 FAX 06-6681-6188

URL [www.chishimatochi.info/found/](http://www.chishimatochi.info/found/)

編集ディレクション & 編集：多田智美 [MUESUM] 編集：永江大 [MUESUM]

アートディレクション：原田祐馬 [UMA/design farm] デザイン：廣田碧 [UMA/design farm]